

小学校に通う我が娘。今まで娘の口からは、出てこなかった様々な言葉？が飛び出すようになりました。誰が聞いても男言葉。流行りの言葉。時には流行語が伝言ゲームのように変化した、意味不明の造語までできます。娘の話を理解するまでに、学校や友だちを思い描き、しばらく脳がフル回転します。

私は今、東京造形大学の美術学部絵画専攻で、大学生に美術を教えています。世代間の違いというのは、ある意味芸術にとっては重要なものです。その世代が漠然と感ずることが、実は社会の動向や深層心理に直

す。作品の意図は理解できないのだけれど、相互理解が得られない…。同世代の別の教員と私の困惑する様子に、上の世代の教授が一言「彼女が使う形容詞、我々の使うものと意味が違うのに気がついた？」形容詞が指す意味のニュアンスが微妙に違う―否定的な意味あ

う。説明をする、指導する、というものは、主体は常に相手にあります。相手と自分は違つことが前提です。自分の言葉で話し続けると、相手が理解できないだけではなく、むしろ誤解を招きます。

「育てる／教える」と「育つ／教わる」ことの可能性

～美術大学の現場から～

前沢知子

その大学での日常は、言葉への理解から始まりません。いわゆる「若者言葉」は比較的簡単です。違いが明らかだからです。難しいのは意味だけが変化してしまつた言葉です。

ある日の合評会（学生の作品の評価をする授業）。ある女子学生が自分の作品を説明している時のことで

いの言葉がむしろ肯定的に使われていたのです。比較的の学生と年齢の近いはずの我が気がつかず、学生と年齢のはなれた教授が気づいたのは、教授が学生と年齢が離れているゆえに、世代間の違いに直面しそれを真摯に受け止め、それゆえ日々の学生に対する丁寧な洞察があるからなのでしょう。

大切なのは、主体を学生／相手に置き、言葉をお互いの「共通語」に置き換えることです。これは内容レベルをさげることは異なります。「専門知識」を「共通語」に置き換える方法は、思考、言語能力、感性、そして努力と忍耐力が必要です。

この努力や忍耐力、育児をする日常にも重なります。子どもの視点にあわせ、子どもを根気強く観察する。子どもの成長を待つ。親は日々の中で、自分の感情を抑えて、子どもに合わせ接することにいややうなしに直面させられます。そういう日常の中で、

に接すること、学生に教えること、人と接すること。人は人から学びとることができるのだと感じます。育てることは自分が育つこと、教えることは自分が教わることなのです。

親は自然に子どもとの共通語を見出し、共感することの喜びと効果」を親子で学びます。

育児、教育を通して、人間は様々に学んで行くのだと思います。だからこそ、子育て／教育は親だけではなく「社会、地域」みんなで行つものなのです。何歳になつても、どんな立場で

も、お互いに学び、育ち続けること、それが人生を生きていくことに感じます。
【美術家、東京造形大学非常勤講師】

5月5日（水・祝）まで、飯田市美術博物館にて、ワークショップ「からだをいっばいつかって」お絵かきしよう！」でできた素材が、作家（前沢知子）によって作品化され展示されています。



大学のアトリエで制作する学生の様子



合評会（学生の作品の評価をする授業）の様子
写真提供・東京造形大学